

令和元年度 学力向上プラン

学校名 中央区立泰明小学校

学校の教育目標

○よく考える子ども ○思いやりのある子ども ○たくましい子ども

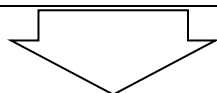
学校経営方針（確かな学力向上にかかわる内容）

児童が、「何のために学ぶのか」を認識し、「何を学ぶのか」が明確に理解でき、「どのように学ぶのか」を考えることができる授業の具現化に努める。そのために、『主体的、創造的な深い学びの実現を図るために、経常的な教材研究、教材開発の推進』をキーワードに創造性に富んだ授業づくりに励むことを、泰明小学校としての教育実践目標とする。

令和元年度「学習力サポートテスト」「東京都学力向上を図るための調査」「全国学力・学習状況調査」の結果分析や、日常の学習の様子等から見られる課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国語	叙述に対し、深い読み取りが苦手な児童がいる。表現することは好むが、表現力に個人差が大きい。同じく、漢字やことわざ等知識面にも個人差が見られる。読書を好まない児童が増えている。	通塾や習い事が多く、家庭内で読書や会話に当てる十分な時間が取れない等、経験不足が要因と考えられる。
算数	「小数のわり算」、「直方体と立方体」（4年生）、「偶数と奇数、倍数と公約数」、「合同な図形」（5年生）、「比例と反比例」「並べ方と組み合わせ方」（6年生）に、課題が見られた。また、どの学年でも、コンパスや定規を用いて作図する力に課題が見られた。低学年も含め、全体的に空間認知能力を必要とする内容は、やや苦手な児童が多い。	直方体と立方体の構成要素の数を求める際、見取り図をかいて考えたり、並べ方と組み合わせ方について、樹形図をかいて考えたりする等、題意をよく考え、求めるべきものが何なのかを捉えて、問題を解けるようにする必要がある。また、作図の課題は、技能を高めるための十分な活動機会を多く設け、誤差なく正確に作図する習慣を身につけさせる必要がある。
社会	資料から必要な内容を読み取ることが弱い傾向がある。知識の定着については、個人差が大きい。また、自分が住まう地域について、興味関心が希薄。	社会的な事象についての興味・関心の薄さが、知識や資料読み取りへの意欲に関係している。時事問題を積極的に取り入れ、社会問題と教科社会の内容を結びつけながら授業作りをする必要がある。居住地の行事参加等の経験不足も起因している。
理科	知識が先に立ち、問題解決学習という視点での学習ができにくい児童が見受けられる。自然体験が少ないために、自然・科学事象に対し、興味関心が薄い。器具を伴う自分の手を使った実験のための技能が低い。	都市部の児童ならではの、という点と、情報が簡単に手に入ることで課題の結果を知り得ており、なぜそうなるのか追究する姿勢が弱いことが原因と思われる。
体育	握力・投球力が全体に低い。俊敏さ・巧みさを求められる種目の成功率が低い。勝敗にこだわり、チームやペア等でお互いを高め合うような行動がとりにくい児童が多い。	日頃の運動量や運動経験の差が大きい。互いに協力することが、結果的に自分にプラスになるのだ、という思考をもてていない。

学力向上に向けた視点	年度末までの目標及び指標
① 学力基盤	言語環境を整え、TPOにあわせた言葉遣いができるようにする。授業の振り返りを重視し、自分の成果と課題・今後のめあてを意識して学習することで、明確な目標をもって効率的に学習に取り組めるようノート指導を充実させる。
② 授業改善	年間を通じて体験型の学習やアクティブラーニングを取り入れる等、授業内容を工夫し、児童が「学ぶ喜び」を感じられる指導技術を磨く。
③ 教員の指導力	特に、若手教員を中心にOJTを活性化させると共に、「中央区授業スタンダード」等を参考に授業の基礎的指導力を磨く。
④ 家庭との連携	家庭学習は、基礎的・基本的な内容の定着を図ることを目的とし、宿題提出率は全児童100%を目指す。また、年間を通じて地域と連携した活動について協力・参画を促す。
⑤ 体力向上	朝の体育的活動「泰明タイム」や、マイスクールスポーツの縄跳びへの取組他、「泰明マラソン」等の体育的行事をより充実させると共に、体育科の校内研究に取り組む。



【目標達成のための具体的な取組内容】

①学力基盤	
取組Ⅰ	言葉遣いについて、まず教師が垂範するとともに、生活指導や学級指導等を通して、場に応じた言葉遣いを指導する。また、「ふわふわ言葉」「とげとげ言葉」「話し方例」等、具体的な例示を示す等校内環境を工夫し、意識付けを図る。
取組Ⅱ	各授業の終末に「振り返りの時間」を設ける。また、算数科等、ノート記述を重視する教科の担当者よりノート記述のモデル例を4月中に提示し、それを基に学年の実態に合わせたノートの記述方法を検討し、学年で統一した丁寧なノート指導を徹底する。
取組Ⅲ	よい言葉遣いができる児童、ノート記述に創意工夫のある児童等、手本となる児童は、積極的に認め、本校で実施している「みそらの星賞」や各学級での賞等で奨励することで、他の児童にも意識化させていく。

②授業改善	
取組Ⅰ	OJTをより活性化させるために、年間予定にOJTを生かした研修日を学期ごとに明記し、各教科主任の授業を通して学ぶ等、確実に指導力の向上を目指せる環境作りをする。
取組Ⅱ	管理職による授業観察を行い、児童が意欲的に学習に取り組める授業構成や指導技術であるかを判断し、よりよい授業を目指して、必要に応じて指導助言や資料提供等を行う。
取組Ⅲ	体育科を研究教科とし、運動能力の向上を目指すと共に、体育科の研究を通して、他教科の学習力も向上するよう学習のめあてに沿った指導計画の立案・主発問や補助発問の選定・学習活動の方法・児童の反応の予想・教材教具の工夫等を図る。

③教員の指導力

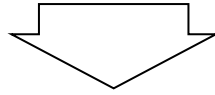
取組Ⅰ	全国・東京都・中央区による各学力調査や、校内で実践するテスト結果を基に、児童の習熟度の実態を具体的に把握し、課題の見られる内容については、補助指導の時間を設けて、100%習熟を目指す。特に、理科・社会については基礎基本の定着を徹底する。
取組Ⅱ	「中央区授業スタンダード」等のモデルを参考にすると共に、OJTの充実を図る。ベテラン教員や教科の専門性の高い教員が、年間にわたって授業を相互に公開する等し、効果的な指導方法についてアドバイスを互に行える環境を整える。
取組Ⅲ	研修を奨励する。教員は、積極的に研修に参加し、指導技術を磨くとともに、研修の成果を校内で共有する。C4thの校内掲示板を活用し、アイデア提供を常態化する。

④家庭との連携

取組Ⅰ	地域と連携した活動について、保護者の協力を適時求め、数多く参加してもらうことで学校の経営方針や教育活動を理解してもらい、より充実した活動の実現を目指す。
取組Ⅱ	保護者会や学校からの通知文を通して、繰り返し、本校の学校経営方針や学校目標の周知を図り、理解協力を促す。
取組Ⅲ	学校評価等を通して、本校の教育活動への意見を吸い上げるとともに、その結果と対策をホームページや保護者会で公表して、基礎基本の徹底や生活指導面への理解・協力を求める。

⑤体力向上

取組Ⅰ	研究教科として、体育科を取り上げ年間6回以上の研究授業を通して、新学習指導要領に対応した教材研究を行い、教材教具の工夫・施設面の充実・指導力向上を体育指導補助員との連携方法を模索しながら進めていく。
取組Ⅱ	「泰明マラソン」や「泰明タイム」、更にマイスクールスポーツの縄跳び指導の充実を図り、楽しみながら体力を向上させる取り組みを多く与える。
取組Ⅲ	体力テスト結果を基に、児童の運動能力と課題の実態を具体的に把握するとともに、外部講師等を積極的に招き、効果的な指導方法や技術の習得の仕方を学ぶ機会を設ける。



【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点	取組の成果	取組の課題
① 学力基盤	<p>算数においては、平成30年度との比較で、A層 77%→68% B層 9%→26% C層 9%→6% D層 5%→0%となり、AB層が増加し、CD層が減少した。この結果から、取り組み効果が、表れていると分析できる。</p> <p>また、他教科も同様に、前年度以上に結果の向上が見られている。</p>	<p>言語環境の改善やノート指導による効果は見られており、下位層の児童は減少しているとはいえ、未だ学習に困難さを抱える児童には、更なる支援を行い、基礎向上を図る必要がある。個別指導の充実や、教員間の密な情報共有をもって改善を図りたい。</p>
② 授業改善	<p>体育科を今年度研究教科にすえ、研究主題を「体育的身体活動を通した心の教育」として「知徳体」のバランスのとれた児童の育成と教師の授業力向上を図った。児童間の肯定感が向上し、安定した学習環境が獲得できる結果を得た。また、体験型学習やアクティブラーニングを取り入れ、学習環境の充実を図れた。</p>	<p>体育科の研究は、昨年度の学校評価で児童の課題としてあがっていた項目を全て改善する成果を得た。今後は、その継続と技能面の更なる向上を目指す。</p> <p>様々な体験型学習やアクティブラーニングは、全てが効果的であったかどうか、今後検証し、取捨選択等の改善を図る必要がある。</p>
③ 教員の指導力	<p>体育科の研究では、年間6本の研究授業を通して、指導技術を磨いた。また、管理職による日常の授業観察も行い、必要に応じ指導助言をし、授業力向上を目指した。各自、課題に併せた研修にも熱心に参加して、必要に応じ、研修の情報提供も行えた。各学年において、若手とベテラン教員がペアを組み、日常的にOJTを行うことができた。</p>	<p>ワーキングバランスを鑑みつつ、各自努力して教材研究や研修参加に取り組んでいるが、時間確保は十分とはいえない。今後も一層、自治体や地域・保護者との連携で、教員の指導力向上のための時間捻出を図りたい。</p>
④ 家庭との連携	<p>今年度の学校評価（保護者評価）は、昨年以上に高評価をいただくことができた。学校と保護者間の連携がとれ、教育活動に理解を深めていただけ成果と分析する。また、家庭との連携がとれ、信頼感が高まった成果か、全体に落ち着いた学校となり、児童が安心して学校生活を送ることができた。</p>	<p>学校に対し、理解協力下さり様々な活動に積極的にかかわっていただく方が多い一方、学校評価等で学校に対し、厳しい評価や意見も少数いただいた。育児に悩まれていることに、学校として情報提供や助言等するためにも、学校と保護者間の垣根を更に低くし、信頼の基、共同育児の姿勢をご理解いただけるよう努めたい。</p>
④ 体力向上	<p>体力テスト結果（全学年平均）の前年度比は、①シャトルラン11.5点アップ②ソフトボール投げ2.6点アップ③握力3.1点アップ④長座体前屈2.2点アップとなり、全項目向上した。取り組みの効果が現れた結果と言える。</p>	<p>体力テストの全項目好成績の陰には、体育科の研究や、本校の特色ある教育活動「なわとび奨励」「泰明タイム」「泰明マラソン」等がある。今後も、この結果を維持・向上するために、前述の取り組みの成果と課題を分析し、改善して取り組む。</p>